

青年のいづく父親像形成に関する研究

—母子関係、父子関係イメージと愛着スタイルに基づく分析から—

Research on the father image formation which a youth holds

-From the analysis based on mother-and-child relations, a paternal relation image, and an attachment style-

鈴木みどり

(教育心理学領域)

問題・目的

近年、共同参加社会になり女性の社会進出もめざましく共働き家庭の増加により、今までのような父親は仕事、母親は家事育児という伝統的な性別役割分担では、家庭の機能が成り行かなくなりつつあり、父親の役割も変化している。そこで父親の役割を船橋(1999)は、「権威としての父親(稼ぎ手・子どもの社会化)から近代家族の「父親不在(稼ぎ手)」の時代へと移行し、現在では、①扶養者、②子どもの社会化の担い手、③子どもの世話をするもの、の3点を取りあげ、新しい父親とは3つを行うトータルな存在であるとしている。

本研究では、幼少期に形成された父子関係イメージ、母子関係イメージと青年期の愛着スタイル(Bartholomew(1990)の指摘する4つの愛着スタイルを使用する。)がその後中学生・高校生・大学生の父親像形成にどう影響しているかを検討する。具体的には1.「安定型」の愛着スタイルは、「愛着軽視型」、「恐れ型」、「とらわれ型」より幼少期の父子関係イメージが高い。「依存的親子関係」は、「恐れ型」、「とらわれ型」が有意に高い(検討1)。2.「安定型」の愛着スタイルは、「愛着軽視型」、「恐れ型」、「とらわれ型」より子育てに対して積極的関わりを持つ父親像が形成されやすい(検討2)。3.中学生は、高校生、大学生より子育てに積極的な父親像「扶養者」「子どもの社会化の担い手」「子どもの世話を形成している(検討3)。4.幼少期の父子関係イメージ、母子関係イメージと青年期のECRを構成する「見捨てられ型」「親密希求」が父親像「扶養者」「子どもの社会化の担い手」「子どもの世話を」に影響する(検討4)以上のことを明らかにすることを目的とする。

方法

1.調査対象

愛知県在住の大学生200名(男93名、女107名)、高校生102名(男59名、女43名)、中学生95名(男49名、女46名)を対象とした。

2.調査期間

2015年4月から8月に実施した。

3.調査内容

以下の質問紙を用いた。

(1) 父子関係イメージ・母子関係イメージを測定する16項目(青柳・酒井,1977)。

(2) 愛着スタイルを測定する。一般他者ECR30項目(中尾・加藤2004)。

(3) 父親像を測定する17項目。稼ぎ手について5項目、社会化について5項目、子育てについて7項目(平澤・齋藤,2013)などを参考に作成。

4. 手続き

大学生は、集団法にて実施した。講義の終了後の時間を利用し、質問紙にその場で回答してもらい回収を行なった。中学生、高校生は、卓球、体操、柔道、陸上など地域体育館クラブ活動の後に送迎の保護者、クラブ指導者に承諾を得て集団法で回収したものと質問紙を配布し、回答後郵送にて回収した。

結果

1.幼少期の親子関係イメージの構造化

幼少期の親子関係イメージに関する回答を、主因子法、プロマックス回転による因子分析を行なった。その結果父親では、「安定的父子関係」 $\alpha = .845$ 、「依存的父子関係」 $\alpha = .681$ であり、信頼性が高いことが示された。また母親では「安定的母子関係」 α 係数は.798「依存的母子関係」 α 係数は.744であり、信頼性が高いことが示された。

2.愛着スタイルの測定

青年の愛着スタイルを構造的に把握するために、30項目の回答を対象に主因子法、プロマックス回転による因子分析を行なった。因子負荷量.400以上の項目を基準にして2因子を抽出した。中学生、高校生、大学生をまとめて因子分析を実施した。

下位尺度の α 係数を算出したところ「見捨てられ不安」で $\alpha = .926$ 「親密性希求」 $\alpha = .799$ の信頼性が得られた。一般他者版ECR尺度について因子分析の結果抽出された2因子「見捨てられ不安」「親密性希求」の各因子の項目合計得点を算出した。それぞれの得点の平均得点(それぞれ、2.01、2.55)を基にして下記のように「安定型」「愛着軽

視型」「恐れ型」「とらわれ型」の4分類にした。

3.父親像

「扶養者」「子どもの社会化の担い手」「子どもの世話」の領域とした。質問紙では、父親像を測定する17項目を扱っており、そのうち「扶養者」について5項目、「子どもの社会化の担い手」について5項目、「子どもの世話」についての7項目から成る。それぞれの領域について α 係数を求めたところ「子どもの社会化の担い手」は.670、「子どもの世話」は.760「扶養者」は.446であった。「扶養者」について α 係数は低い重要な内容を示す項目と考えられるためここではそのまま使用することにする。

4.親子関係と愛着スタイルとの関連性 (検討1)

幼少期の父子関係イメージ、母子関係イメージと青年期の愛着スタイル「安定型」「愛着軽視型」「恐れ型」「とらわれ型」との関連について検討を加えた。父子関係イメージ、母子関係イメージをそれぞれ従属変数、愛着スタイルの4類型を独立変数とする一元配置分散分析を実施した。安定的母子関係において「安定型」の愛着スタイルが他の愛着スタイルよりも高い傾向があることが示された。依存的父子関係において「恐れ型」が安定型より有意に高いことが示された。

5.愛着スタイルと父子関係との関連 (検討2.3)

①「扶養者」の父親像形成に関する検討

父親の「扶養者」としての役割に愛着スタイル、年代差(中学生,高校生,大学生),性差(男女)がどの様に影響しているかを検討するために、「扶養者」を従属変数、青年期の愛着スタイル(4類型)×年代差(中学生,高校生,大学生)×性差(男女)を独立変数とする3要因の分散分析を実施した。その結果、愛着スタイル、性差に主効果がみられ、性差×年代差に交互作用がみられた。まず、愛着スタイルに下位検定(Tukey法)を行ったところ「安定型」は「恐れ型」よりも有意に高いことが示された($p < .01$)。次に性差については、男子は、女子よりも有意に高いことが示された($df = 1, 375, F = 7.41, p < .01$)。さらに性差×年代差の交互作用がみられたので、単純主効果を求めたところ、女子において、中学生が高校生、大学生よりも有意に高い(それぞれ $p < .05, p < .01$)

ことが示された。

Table1 「扶養者」に関する愛着スタイル、年代、性別の比較

年代差、性差		愛着スタイル			
		安定型 M SD	愛着軽視型 M SD	恐れ型 M SD	とらわれ型 M SD
中学生	男	3.34 (.50)	3.07 (.34)	2.93 (.30)	3.13 (.43)
	女	3.32 (.51)	3.24 (.37)	3.10 (.29)	2.92 (.34)
高校生	男	3.23 (.48)	3.08 (.43)	2.83 (.21)	3.09 (.43)
	女	2.89 (.33)	2.98 (.37)	2.74 (.47)	3.05 (.38)
大学生	男	3.16 (.34)	3.15 (.51)	3.05 (.37)	3.36 (.47)
	女	2.89 (.44)	2.85 (.29)	2.93 (.37)	3.00 (.42)

Table2 「扶養者」に関する3要因の分散分析表

変動因	平方和	自由度	平均平方	F	有意水準
愛着スタイル	1.970	3	.657	4.037	.008
性差	1.205	1	1.205	7.406	.007
年代差	0.919	2	.459	2.824	.061
愛着スタイル×性差	0.560	3	.187	1.148	.330
愛着スタイル×年代差	2.035	6	.339	2.085	.054
性差×年代差	1.210	2	.605	3.717	.025
愛着スタイル×性差×年代差	0.554	6	.092	0.567	.756
誤差項	61.016	375	.163		

②「子どもの社会化の担い手」形成に関する検討

青年期の愛着スタイルが、中学生・高校生・大学生の抱く父親像形成にどう影響しているかを検討するために、年代差、性差、父親像の「子どもの社会化の担い手」との関連を明らかにするために3要因の分散分析をした。

その結果「愛着スタイル」に主効果が見られたので下位検定を行った。その結果「安定型」は「愛着軽視型」と「恐れ型」より有意に高いことが示された($p < .05$)。愛着スタイルと性差、性差と年代差に交互作用がみられ、単純主効果を求めたところ女子中学生は高校生より有意に高いことが示された($p < .05$)。愛着スタイルについては、「恐れ型」において女子は男子より有意に高いことが示された($p < .05$)。また、男子は、愛着軽視型より「安定型」が有意に高く($p < .01$)、「恐れ型」より「安定型」が有意に高いことが示された($p < .01$)。

Table3 「子どもの社会化の担い手」に関する愛着スタイル、年代、性別の比較

年代差、性差		愛着スタイル			
		安定型 M SD	愛着軽視型 M SD	恐れ型 M SD	とらわれ型 M SD
中学生	男	3.78 (.33)	3.31 (.63)	3.20 (.42)	3.06 (.55)
	女	3.80 (.43)	3.76 (.40)	3.60 (.41)	3.52 (.44)
高校生	男	3.80 (.34)	3.60 (.39)	3.29 (.41)	3.63 (.44)
	女	3.42 (.56)	3.31 (.33)	3.51 (.41)	3.52 (.51)
大学生	男	3.57 (.37)	3.38 (.60)	3.33 (.45)	3.57 (.53)
	女	3.58 (.45)	3.41 (.51)	3.60 (.41)	3.63 (.28)

Table4 「子どもの社会化の担い手」に関する3要因の分散分析表

変動因	平方和	自由度	平均平方	F	有意水準
愛着スタイル	3.056	3	1.019	5.000	.002
性差	0.211	1	.211	1.034	.310
年代差	0.239	2	.120	0.587	.557
愛着スタイル×性差	2.074	3	.691	3.394	.018
愛着スタイル×年代差	0.875	6	.146	0.716	.637
性差×年代差	1.350	2	.675	3.312	.038
愛着スタイル×性差×年代差	1.066	6	.178	0.872	.515
誤差項	76.395	375	.204		

③ 「子ども世話」に関する検討

青年期の愛着スタイルが、中学生・高校生・大学生の父親像形成にどう影響しているか、年代別、性差、父親像「子どもの世話」との関連を検討するために3要因の分散分析をした。

「子ども世話」の父親像形成について「愛着スタイル」に主効果が見られたので検定 (Tukey 法) を行った。その結果、「安定型」が「愛着軽視型」より有意に高いことが示された ($p < .05$)。

Table5 「子どもの世話」に関する愛着スタイル、年代、性別の比較

年代差: 性差	愛着スタイル				
	安定型 M SD	愛着軽視型 M SD	恐れ型 M SD	とらわれ型 M SD	
中学生	男	3.65 (.32)	3.29 (.57)	3.43 (.37)	3.71 (.33)
	女	3.45 (.35)	3.39 (.22)	3.42 (.27)	3.37 (.46)
高校生	男	3.50 (.37)	3.55 (.34)	3.31 (.52)	3.43 (.37)
	女	3.37 (.42)	3.38 (.42)	3.56 (.38)	3.53 (.36)
大学生	男	3.67 (.36)	3.48 (.49)	3.38 (.40)	3.69 (.35)
	女	3.43 (.33)	3.27 (.37)	3.46 (.36)	3.55 (.29)

Table6 「子ども世話」に関する3要因の分散分析表

変動因	平方和	自由度	平均平方	F	有意水準
愛着スタイル	1.249	3	.416	2.860	.037
性差	0.468	1	.468	3.219	.074
年代差	0.116	2	.058	0.398	.672
愛着スタイル×性差	1.041	3	.347	2.386	.069
愛着スタイル×年代差	0.652	6	.109	0.747	.612
性差×年代差	0.330	2	.165	1.134	.323
愛着スタイル×性差×年代差	0.778	6	.131	0.903	.493
誤差項	54.565	375	0.146		

6.父親像形成に及ぼす要因の検討 (検討4)

幼少期の親子関係、青年期の ECR が父親像形成に影響しているとする仮説を検討するために共分散構造分析を実施した。ここでは、適合度を満た

すモデル図について取り上げる。男子中学生で「安定的父子関係」から父親像の「子どもの社会化への担い手」と「子どもの世話」への有意な正のパスがみられた。男子高校生は「親密性希求」から「子どもの社会化の担い手」へ有意な正のパスがみられた。男子大学生では、「親密性希求」から「子どもの世話」に有意な正のパスがみられた。中学生、高校生、大学生とも「依存的父子関係」から「見捨てられ不安」に3つの父親像とも正のパスがみられた。高校生では、「見捨てられ不安」から「子どもの社会化の担い手」へ「見捨てられ不安」から「子どもの世話」へ負のパスがみられた。

高校生の「安定的母子関係」で、「子供の社会化の担い手」「子どもの世話」に有意な正のパスがみられ、中学生の「安定的母子関係」から「親密性希求」へ3つの父親像すべてに有意な正のパスがみられた。大学生より中学生、高校生のほうが安定的親子関係からの有意なパスがみられた。女子中学生、高校生、大学生では、「安定的父子関係」からの有意なパスがみられず、「安定的母子関係」では、大学生、高校生に「親密性希求」への有意な正のパスがみられた。「安定的母子関係」から「子どもの社会化の担い手」「子どもの世話」へ高校生、大学生において有意な正のパスがみられた。

父子関係では、女子より男子にパスが多くみられた。そして、男女とも父子関係より母子関係のほうに有意なパスがみられた。

「父子関係イメージ」 → 「見捨てられ不安」

→ 「子どもの社会化の担い手」・「子どもの世話」の流れは高校生男子において確認されたのみである。

考察

現代社会において、基本的には夫婦による協力が大前提で、特に、父親が子育てにいかにかかわるかが重要である。本研究の目的である 1. 「安定型」の愛着スタイルも人は、「愛着軽視型」、「恐れ型」、「とらわれ型」より幼少期の親子関係イメージが高い。「依存的親子関係」は、「恐れ型」、「とらわれ型」が有意に高いことが中学生では示された (検討1)。2. 「安定型」の愛着スタイルの人は、「愛着軽視型」、「恐れ型」、「とらわれ型」より子

育てに対して積極的関わりを持つ父親像が形成されやすいことが示された(検討 2)。3.中学生は、高校生、大学生より有意に高く積極的な父親像がみられた(検討 3)。4.幼少期の父子関係イメージ、母子関係イメージと青年期の ECR を構成する「見捨てられ型」「親密希求」の父親像への影響では、検討 4 については、殆どの場合、仮説が十分に支持されておらず、中学生、高校生の場合のみ一部示されているのみである。橋本(2010)は、幼児期における父親との愛着関係がその後の対人関係の形成に重要であるとし、本研究は、父親との愛着関係の高い群は、情緒も安定し父親の役割が効果的に作用しているということの一部支持する結果となった。

また、田辺(2005)の子どもに写る父親の姿は変化し、大黒柱としての父親は姿を消し、父親は家族の一員になりつつあるとし、世代差が見られるとする指摘の一部を支持することが示された。

女子の父子関係でパスがみられない要因の一部として、青柳・酒井(1977)が、質問紙が幼少期を回想させる方法のため、現状から過去を再体制化させる可能性があり、そのため、実際の過去の出来事を歪曲化させることもあることを考慮しなければならないとしている。本研究では、改めて父親の役割について考え幼少期の父親の関わりが青年期の ECR,そして、将来の父親像に父親の影響があり、これからの新しい子育てに積極的な父親像が重要であると考え。幼少期に両親や周りの大人に愛情豊かな環境で育ち、安定的な親子関係を築き成長していくことが、青年期の ECR に影響する。安定型の愛着スタイルは育児に積極的な父親像に影響すると考えられる

今後の課題

今後の課題として 3 点指摘する。第 1 に今回用いた共分散構造分析では、モデルの適合度は確認されたが、他にもモデルが存在することが考えられるので、更に検討を加える必要がある。第 2 に子どもが成長するなかで、様々な要因が結果につながると考えられるので、本研究では、幼少期の親子関係イメージと青年期の ECR から検討したが、社会などの環境、家庭環境などからも影響をうけ

成長していくことも考慮する必要がある。男性の子育てや子どもの母親像・父親像の形成のメカニズムを探求することは今後の父親像のあり方を探る上で極めて重要な位置づけを持つものと考えられる。第 3 に父親の子に対する具体的な関わりを介して、子どもの愛着行動へと及ぼすとすれば、父親の愛着表象と、父親の子に対する具体的な関わりの中にどのような関連性があるのか、基本的な世代間伝達のメカニズムも研究していく必要があると考える。今後さらにこうした観点を見出していくことが重要であると考え。

引用文献

- 青柳肇・酒井厚(1977) アタッチメントと回想による幼少期のアタッチメントとの関係
早稲田大学人間科学研究
- Bartholomew, K. (1990). Avoidance of intimacy: An attachment perspective. *Journal of social and Personal Relationships*, 7, 147-178.
- Bowlby J. (1973) Attachment and loss : Vol. 1. attachment. New York : Basic books. (1976 母子関係の理論 1 : 愛着行動 岩崎学術出版社
- 船橋恵子(1999) 父親の現在 教育出版
- 橋本奏子(2010) 大学生における父親との愛着関係と社会性に関する一考察 心理学研究 健康心理学専攻 臨床心理学専攻 1.92-103.
- 平澤実穂子・斉藤正典(2003). 父親のワーク・ライフ・バランス観に関する研究 子ども教育学会紀要 5, 83-90.
- Lamb, M. E. (1976) Twelve-month-olds and their parents : Interaction in laboratory playroom. *Developmental Psychology* 12.237-244.
- 中尾達馬・加藤和生(2004) 成人愛着スタイル尺度 (ECR) の日本語版作成の試み 心理学研究, 第 75 巻, 2 号, 154-156.
- 田辺昌吾(2005) 乳幼児の父親がもつ「父親になった実感」とその関連要因 生活科学研 誌, Vol4, 1-8.